

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 19 2015*

留学生を対象とした日本語科目における
ヒューマンライブラリーの試み

実践報告

宮 崎 聖 乃

Using the Human Library in Japanese Courses
for International Students

MIYAZAKI Kiyono

長崎外大論叢

第19号
(別冊)

長崎外国語大学
2015年12月

【研究ノート】

留学生を対象とした日本語科目における ヒューマンライブラリーの試み 実践報告

宮崎 聖 乃

Using the Human Library in Japanese Courses for International Students

MIYAZAKI Kiyono

Abstract

The “Human Library”, started in Denmark in the year 2000, has emerged as a leading global method to reduce prejudices and encourage understanding in international communities, through dialogue and interaction.

This paper reports on the application of “Human Library” activities in a Japanese-language learning course for international students with a focus on developing skills in four areas: 1) setting aside one’s own knowledge, experience, and stereotypes to listen to and comprehend another’s speech, 2) accepting diversity and thinking from the perspectives of multiple individuals, 3) using an understanding of others in order to reflect upon and identify issues within one’s own culture, and 4) expressing one’s opinion while considering the positions of others.

キーワード：日本語教育 多様性の受容 ヒューマンライブラリー

1. はじめに

1) 言語教育が目指すもの

言語教育の目指すものは言語の習得だけでなく、言語を使って他者とコミュニケーションを行い繋がることのできる力、他者と繋がることによって社会に参加し貢献できる力の育成であろう。これは大学における日本語教育においても同様であると思われる。日本語教育を含む言語教育において、自分と異なる他者と繋がるための能力を育成するために、言語知識に加え、「自分の知識や経験、固定観念による判断を保留して他者の話を聞き、理解する力」、「様々な立場に立って考えることができる力」、「他者を理解することで自分自身や自文化を振り返り、問題を発見できる力」、「他者の立場に配慮しつつ、自分の意見を発信できる力」といった多様性への気づきと受容を基礎とした能力を育成していくことは肝要であると考えられる。このような能力を育成するための学習活動として、大学における留学生を対象とする日本語科目において、ヒューマンライブラリー(注1)と呼ばれる活動を行った。本稿はその実践報告である。

2) ヒューマンライブラリーとは

ヒューマンライブラリー（以下 HL）とは2000年にデンマークで始まった、社会における差別と偏見を低減し、理解と対話を進めようという多文化共生社会の実現を目指す取り組みである。開催会場を「図書館」に、身体的ハンディキャップを持つ人、LGBT（注2）、難民、イスラム教徒などある社会において少数派であり、そのため差別や偏見の対象となりやすい人々を「本」になぞらえ、集まった人々（「読者」）に貸し出す。「読者」と「本」はともにテーブルに着き、対話を通して相互理解を深めていく。

日本では2008年6月京都において行われた ATAC カンファレンス2008の中でリビングライブラリージャパンによって開催されたものが最初であるが、現在は駒沢大学坪井ゼミ、獨協大学工藤ゼミ、明治大学横田ゼミなど大学の研究室が主体となって開催しているもの、「ブックオブ・リーフグリーン」や筆者が代表を務めるヒューマンライブラリー Nagasaki（以下 HLN）実行委員会など市民団体が開催しているものなどがある。

HL の当日の大まかな流れは以下の通りである。

- 1) 会場に数人から数十名の「本」が集まる。
- 2) 来場した一般参加者（「読者」）はブックリスト（後述）を見て、自分の読みたい「本」を選び予約する。
- 3) 「本」と「読者」が対話を行う。この際、「読者」は1名から3名程度の少人数である。「本」が自身について語るだけでなく、「読者」も質問をしたり、意見を述べたりすることで理解を深めていく。
- 4) 2) 3) を繰り返す。「読者」は数冊の「本」を読むことができる。

2) で示されている「ブックリスト」とは、「読者」が、どの「本」と対話するかを決める際に参考とするものである。「ブックリスト」には、当日参加する「本」の「著者名（例：LGBT、視覚障害者など）」、「本のタイトル」、「あらすじ」など「本」自身による簡単な説明が記されている。

HL は話し手と聞き手が対面して直接会話するという、一見すると非常にシンプルな活動である。しかし、聞き手にとって話し手は普段あまり接する機会がない人々であり、社会的マイノリティである話し手は、初対面の相手に自分について語る。対話によって相互理解がなされた時、双方にとって得るものは大きいと思われる。HL の効果について坪井（2012）は「読者効果」、「語り手効果」、「主催者効果」の3つを挙げている。「読者効果」とは「偏見の低減」、「異質な他者に対する関心」の深まりといったものであり、「語り手効果」とは「語りを通じての自己呈示」による「自己の変容」を促す効果である。「主催者効果」とは、HL を主催することによって養われる「コミュニケーション能力」や、殊に学生が主催者となって開催した場合に「社会人基礎力」の養成や、「課題解決型学習効果」が期待できることとしている。

HLには「読者」として参加する人だけでなく、主催者をはじめ、支援者などの開催に関わる人々に多様性への気づきと寛容さを促す効果が期待できる。また「本」自身にも自己開示と自己像の客観視や再認識に加え、「本」自身が持つ社会や他者への偏見や固定観念に対する再認識という機会をもたらすことが期待できるだろう。

3) 日本語科目における HL の試み

HLは「多様性」を重視した「対話」である。これを留学生対象の日本語科目に取り入れることで、多様性への気づきと受容を促し、「自分の知識や経験、固定観念による判断を保留して他者の話を聞き、理解する」訓練となり、「様々な立場に立って考えることができる力」と「他者を理解することで自分自身や自文化を振り返り、問題を発見できる力」を育成することが期待できるのではないか。また聞くだけでなく対話を行うことは「他者の立場に配慮しつつ、自分の意見を発信できる力」を養うことができるのではないか。このような観点から、言語知識の習得にとどまらない日本語教育の実践として、留学生を対象とする日本語科目において小規模な HL を行った。

通常の HL では「本」は少なくとも7、8名から大きいものでは数十名参加し、「読者」はその中から、読みたい「本」を選んで対話を行う。しかし今回は「本」の数を3名とし、受講生は3名すべてと対話することとした。これは90分という限られた時間の中でできるだけ多くの「本」と対話してもらいたいと考えたからである。

2. 授業の概要

1) 科目内容

「アクティブ日本事情B」は2015年春学期開講の短期留学生（半年および1年、長崎外国語大学に協定校から留学している学生）対象の日本語科目である。

この科目は「学内外におけるアクティビティを通じて、応用的な日本語能力の取得を目的とする」という科目規定に基づき、「日本の文化や社会に対する理解と関心を深める」こと、「異文化について学ぶことで自文化に対して客観的に見ることができるようになる」こと、「多様な日本語話者と日本語によるコミュニケーションを行うことで、実践的な日本語コミュニケーション力を身につけ協力的なコミュニケーションができるようになる」ことを目標として、週1回90分の授業が15週にわたって行われる。

2015年春学期は、「日本の若者」「日本のテクノロジー」「日本社会におけるマイノリティ」の3つテーマについて、クラス内でのディスカッション、日本人学生を招いてのディスカッションや異文化理解のためのアクティビティ（ビジターセッション）、見学、学外からゲストスピーカーを招いての小規模 HL を行った。これと並行して学期中に「日本でみたもの」と各自が自由に選んだテーマで合計2回のポスター発表を行った。

2) 受講生

長崎外国語大学では短期留学生は、日本語のレベルによって、日本語1（初級）から6及びS（上級）の7つのコースにプレイスされ、この「アクティブ日本事情B」は日本語3以上を対象に開講し、16名の学生が受講した。

日本語3は、学期開始時に母国で初級日本語を200～300時間程度学習しており、概ね日本語能力試験N4レベルに相当する初級後期の学生が、1学期間日本語と関連科目を学ぶコースであり、日本語Sは学期開始時にすでにN1を取得しているか、それと同等以上の日本語力を有する学生のためのコースである。

2015年度春学期「アクティブ日本事情B」を受講した学生の所属コースと国籍は以下の通りである（表1）。参考として、相当すると思われる日本語能力試験のレベル（N1～N4）を付しているが、これらのコースは、独自のプレズメントテストによって決定されており、受講生の日本語力と日本語能力試験のレベルが必ずしも一致するものではない。

（表1）本授業受講生の日本語レベル及び人数

	日本語3 N4相当	日本語4 N4～N3相当	日本語5 N3～N2相当	日本語6 N2～N1相当	日本語S 学期開始時にN1を取得済み
中国			4	1	5
タイ	3				
アメリカ	1	1	1		

表からも分かる通り、受講生間の日本語力の差は大きく、出身、母語、社会・文化的背景もさまざまであった。クラスにおける共通言語は日本語のみである。またHL実施時点での在日歴は3ヶ月～9ヶ月であった。

3) 実施まで

「アクティブ日本事情B」は1学期15回で完結する科目である。小規模HLは、2015年4月8日に始まった春学期の11週目の授業（6月26日）に行った。以下、小規模HL実施までの第1週から10週の授業内容の概略を記す。

第1～3週：テーマ「日本の若者」

ビジターセッションの準備、ビジターセッション、フィードバック

本授業におけるビジターセッションとは留学生対象の授業にビジターとして日本人学生を招き、

ディスカッションやアクティビティを通して、実践的な日本語力の養成とともに異文化理解の促進を目的とした活動を指す。今回のビクターセッションに際し、受講生は日本人学生に授業への参加を依頼し、授業内では受講生（留学生）と日本人学生が共に以下のような活動を行った。

- ・それぞれが「高校生がしてはいけないと思うこと（親に嘘をつく、学校をサボる、異性と外泊するなど11項目）」を各自悪いと思う順に並べたリストを作成し比較する。
- ・「大学生活で大切なもの（一生懸命勉強すること、いろいろな経験をすること、健康、いい友人など9項目）」のダイヤモンドランキング（注3）を作成し、小グループでそれらを見比べながらディスカッションを行う。

これらの活動は、文化や社会が価値観の形成に与える影響の有無や、価値観・倫理観の多様性に気づき、考える機会を設けることを目的としており、受講生が提出したフィードバックシートによれば、この目的は概ね達成できたように思われる。

第4～6週：テーマ「日本のテクノロジー」

TOTO 見学の準備、見学、フィードバック、ポスター発表の準備

この科目では第5週に学外活動（見学）を予定しており、今回はTOTO長崎ショールーム（長崎県西彼杵郡長与町まなび野3丁目1-1）の見学を行った。海外でも人気の高い「ウォシュレット」や、さまざまな配慮が行き届いた浴室、キッチン設備などが、ただ便利さを追求しただけのものではなく、技術が高齢者や障害を持つ人たちの日常生活をどのように支えるかということを学んだ。

第7～10週：ポスター発表／小規模HL準備

受講生は、第6週までに上記の2つのテーマと並行して、「日本でみたもの」というテーマでのポスター発表の準備を始めており、第7～9週は発表のための準備と練習を行い、第10週に昼休みを利用してポスター発表を行った。同時に第9、10週の授業では小規模HLに向けての準備を行った。授業では1) HLとは何か、2) HLの世界的広がり、3) HLの参加者（「本」「読者」「主催者」）、4) 会場の様子、5) 当日の流れについて、写真や動画などを使いつつ説明した。HLN実行委員会はこの時点で4回のHLを開催しており、授業では実際のHLNで使用したブックリストなども紹介した。このような準備ののち、第10週の授業では翌週行う小規模HLのためのブックリスト（表2）を配布した。ここではできるだけ先入観や固定観念を持たずにHLに臨んでもらうために「本」に関する詳しい説明は避け、記載された内容の確認のみを行った。

(表2) 本授業における小規模 HL ブックリスト

1	ぎそく せいかつしゃ 義足生活者	あし うしな ひ 足を失った日から	じこ あし うしな ごたいふまんぞく 事故で足を失った日から今日まで… 五体不満足になるというこ と。困難や葛藤。さまざまな感情。どんな風に考え生きてき たかを赤裸々に語ります。皆さまのご質問にもお答えしたいと 思いますので、疑問に思うことはぜひ聞いて下さい。
2	なんびょう なに びょう 難病 何?病?	いま い 今も生きてます!	こ ころ きょう いずんざい つ あ せんてんせいぐ 子どもの頃から今日まで、今現在も付き合っている『先天性副 腎過形成』という持病。病気というのは誰でも避けたいことで しょうが付き合っているからこそその人生をお話できればと思 います。難しい言葉は使いません。話している中でも質問は 受け付けます。楽しい時間を過ごしましょう!
3	もと 元ショーパブダンサー (ニューハーフ)	ありのままに生きること	みずか ひてい す せいしゆんき ころと 自らを否定しながら過ごした青春期。心のバランスがうまく取 れなくなり、自分が自分であるために故郷を逃げ出すことを決 意した25歳。しかし飛び込んだ世界はまるで異世界。無我夢 中で乗り越えた新人時代。演じる喜びを知った全盛期。演者が 作り手に関わり、価値観が変わった30代後半。平凡に憧れ ながら、非凡に生きた40年を讀んでいただけたら嬉しいで す。
1	Person with artificial leg	From the day I lost my leg	Since the day I lost my leg in an accident...I came to understand the meaning of being handicapped. Difficulties and trouble, various feelings...I will relate you my way of thinking and living, and will answer to each single question you may have.
2	Intractable Disease? What? Disease?	Yet I am alive!	I have been suffering from Congenital Adrenal Hyperplasia since I was a little kid. I am sure an intractable disease is something most people do not want to suffer from, but let me tell you the life of someone who is actually suffering from one. I will use easy words only, and do not hesitate to ask anything you want. Let us enjoy!
3	Ex Pub Dancer (Transvestite)	Live as oneself	I rejected myself in my adolescence. My mind got progressively unbalanced, and I was forced to leave my hometown in order to find myself, at the age of 25. But the world I jumped into was a sensibly different world. I somehow survived, getting absorbed in my new life. Then the golden age came for me, when I discovered the joy of acting. My way of thinking changed during my thirties, when I moved from actor to director. I will be glad to relate you my extraordinary story, though I was looking for an ordinary one...

4) 小規模 HL 当日

当日、「本」として参加したゲストスピーカーは、「義足生活者」、「難病」、「元ショーパブダンサー(ニューハーフ)」の3名で、「本」としての呼称(「」にて示したもの)は自称である。この「本」はHLN実行委員会主催のHLでも「本」として参加しており、HLそのものは初めてではなく、過去に参加したHLでは少数ではあるが外国人の読者もいた。しかしながら、「読者」が全員外国人というのは初めてである。なお、全員が長崎市あるいは近郊に居住しており、受講生と同じ地域社会に

暮らす人々である。一方受講生は16名中15名（1名欠席）が参加した。

当日は1回あたりの対話時間を25分、1名の「本」に対する「読者（受講生）」の数を6名までとし、対話時間を3回設定した。第10週の授業において下のような表（表3）にそれぞれの学生がどの順番でどの本を読むか、名前を記入したものを作成し、当日掲示した。5、6名の小グループを作り、グループごとにも移動するという形にしなかったのは、毎回同席する学生が変わることで、学生間での考え方の違いに気づく機会も増やしたかったためである。また授業の最初と最後に、受講生、「本」の双方にアンケートを行い、「本」には更に授業後後30分程度の振り返りのディスカッションを行ってもらった。

（表3）本授業における「本」との対話予定表

	1 義足生活者	2 難病	3 元ショーパブダンサー
1回目			
2回目			
3回目			

3. 実施後

1) アンケート及び「本」による振り返り

【受講生：対話前】

対話の直前に受講生に対し、以下の2つの質問からなる無記名自由記述式の質問紙調査をおこなった（15名中14名が回答）。

①今までに『本』のような人たちと会ったり話したりしたことがありますか。

②「本」の人たちや「本」とのセッション（対話）について、今、どんな気持ちですか。

①の質問に対し8名の受講生が、「ない」と回答した。「ある」と回答した6名が上げたのは、「LGBT」、「HIV患者」、「糖尿病患者」、「世界中の国を旅行した人」、「自分の父」、「自分の祖父」で、社会的マイノリティという意味だけでなく、「様々な経験を持った人」として述べていた。

②の質問に対しては、複数回答で、「期待」、「新しい経験・知識をもらいたい、もらえると思う」、「興味・興味深い」、「聞きたい」、「楽しみ」、「興奮」といった期待感を回答した受講生が9名、「緊張」と言う言葉を使って回答した者や「どのような対応をしたらいいかわからない」といった、緊張や不安を表明した者が7名、「ドキドキ」という緊張や不安とも期待とも取れる回答をした者が1名、「本」に対する「敬意」や「感謝」を回答した者が2名いた。

【受講生：対話後】

すべての対話の終了後、受講生に対し対話前と同様の形で以下の質問を行った。

①また参加したいですか

②「本」の人たちや「本」とのセッション（対話）について、今、どんな気持ちですか。

①の質問に対し全員が参加したいと回答した。

②に対して、もっとも多かった答えは「本」や「本」の語った内容に対する【肯定的な感想】で、「強い」、「フレンドリー」、「頑張っている」、「すごい」、「元気」、「面白かった」、「楽しかった」、「勉強になった」、「心が強くなった」など9名が述べている。そのほかに「いろんな人間がいる」、「違う人という話するのが大事」、「ちょっと違う見方ができるようになった」、「日本社会に対する理解の助けになった」など【多様性への気づき】を述べた受講生が4名、「自分も頑張らなければ」、「自分はどれだけわがままでしたか」、「人生に感謝したい」、「私の困難さは小さい」など、【自身の立ち位置への気づき】を述べた者が6名いた。この他『「本」の人の気持ちがわかりました」、「悲しさや辛さなどの気持ちを感じられるような気がする」という【共感】を述べた者も2名いた。

対話前後の受講生の回答から、多くの受講生が不安と緊張と期待をもって対話に臨み、「本」やその話から強い印象を受け、自らを振り返る者もいた様子が伺われる。これらの回答は、1名を除き日本語を用いて行われた（1名は英語にて回答）ため、多くの受講生にとって自分の意見や感想を十分に説明することは困難だったと思われるが、ほとんどが単語や一文だけではなく、複数の文による回答をしていた。受講生の日本語のレベルにはばらつきがあるものの、みな真剣に回答したことがわかり、それはこの体験が受講生にとって印象的なものだったことを示唆していると思われる。しかしながら否定的な感想や抵抗感、複雑な感情などは表現しにくく、あえて表明しなかった、あるいはできなかった受講生がいたかもしれないことは否定できない。

このHLを計画した段階でもっとも危惧していたのは、明らかな抵抗感や嫌悪感などを持って臨む受講生がおり、結果として「本」や他の受講生を傷つけるということになるという事態であったが、実際はそういったことはなく、全体として大変積極的で友好的な雰囲気であった。しかし、常にこのような状況で行えるという確証はなく、特に今回のように受講生側に対話する「本」の選択権がない場合は、注意が必要だと思われる。受講生が、自分が対話したい「本」を選べるようにすることも、授業内HLにおいて現実的な方策であろうし、HL実施までの学習内容や授業の組み立ては重要であろう。

【「本」：対話前】

「本」に対し、『「読者」の人たちやセッション（対話）について、今、どんな気持ちですか』という自由記述式調査をおこなったところ、「本」3名のうち2名が「不安」、1名が「緊張している」と答え、「不安」の理由として「言葉の壁」を、「緊張」の理由として「外国人との接点が少ないこと」をそれぞれ1名ずつがあげている。

【「本」：対話後】

①『「読者」の人たちやセッション（対話）について、今、どんな気持ちですか』

②今回のHLに参加したことで、あなた自身が変わったと思う点があったら、教えて下さい。
という2つの質問を行い以下の回答を得た。

①に対する回答

- みなさん、表情の変化があり理解していることが目に見えてわかった。病気の内容を話していると

きはつらそうな表情を見るのはつらかった。前向きになれる話だったと言ってくれたことは印象的だった。何より楽しい時間だった。

- すごい笑顔で話を聞いてくれてうれしかったです。でもちゃんと話を伝えることができたかやっぱり不安もあります。
- 「解りたい」「理解したい」という気持ちが伝わってきて嬉しく思いました。心を通じ合えるように話すのはとても幸せです。

②に対する回答

- 外国の方と話をし、日本語の難しさを再認識できました。伝わってよかったとしみじみです。日本人より反応が良く楽しめました。
- 最初やっぱりちょっとこわかったのは、やっぱり私にも外国人の人に対する偏見があったかなと…。でも腹を割って話せば何ら日本人と変わらないなと思いました。もっと外国人の方々と触れ合う機会が増えるといいなと思います。
- もっと素直にもっとストレートに表現できたらもっと良いなあと思いました。

授業終了後行った振り返りでは、「(対話前は) 心配していたが、思った以上に伝わったと思う」という意見や「こんなに一生懸命だった(伝えようとした)のは初めてかも」、「こちらの話はわかってもらえたとは思いますが、(受講生が)言いたいことがうまく言えなかったようで残念だった」という意見も聞かれた。

「日本人の『読者』と違いましたか。」という質問に対し、「反応がはっきりしている」、「質問がストレート」、「熱心でずっとこっちを見つめていた」などの感想が聞かれ、「また参加したいですか」という質問に対しては全員が「したい」と答えた。

「本」との振り返りの中で印象的だった感想の一つに「今まで、笑い話としてや面白おかしくしか話せなかったことを今回は『悲しかった』、『大変だった』というふうに率直に話し、それがよかったと思う」というものがある。これは、受講生の日本語力という制限があったために、いつもより率直に簡潔に話す必要があったからだと思われるが、結果として「本」の自己開示や自己への再認識を促すことになったようである。対話中には、絵を書いて説明したり、身振り手振りが大きくなったりすることも多く、そのようにしてコミュニケーションの手段を模索する過程において、「本」自身が強く伝えたいと思うことが明確化され、「本」自身の気づきへとつながっていったのかもしれない。

また、振り返り中、「単純に、伝わりとうれしいということを改めて実感した」という意見が何度も聞かれ、このことが「本」にとって非常に印象的だったことも伺われた。通常の HL であれば、話を聞きたいと思って訪れる「読者」と、少なくとも言語的には意思の疎通に問題のない状況で行われるコミュニケーションを、話を聞きたいと思っている保証のない「読者」に対して、限定的な言語環境で行わなければならなかったことは通常の HL 以上に伝えられた際の喜びをもたらし、不自由な言語環境は伝えたい情報をより明確にさせたようである。

2) 第12～15週

HL 実施後、翌週の授業においてそれぞれの国の社会的マイノリティの現状について、ディスカッ

ションを行った。「よく知らない」、「わからない」という受講生も多い一方で、家族や友人にLGBTがおり、その経験を語る受講生や、移民としての自らの経験を語る受講生もいた。

第13、14週は最終週に行われるポスター発表の準備とし、第15週には、受講生が選んだテーマのポスター発表を行った。発表の中にはHLとそれに先立つ授業に影響を受けたと思われるもの(「LGBT」、「チベット」、「ハーフ〜2つの国籍の間〜」)もあった。

4. 終わりに

留学生を対象とした日本語科目におけるHLの試みは、受講生に自身を取り巻く地域社会にいろいろな人が暮らしているという身近な社会の多様性を現実的に感じ、それについて理解し考える機会を与えたと思う。

また受講生の振り返りを見ると、受講生が他者の話を聞いて理解したこと、あるいは理解しようと努め、不十分であったとしても自分なりの理解を得て、考察したこともうかがわれる。受講生自身がどのような知識や経験、固定観念を持ってHLに臨んだのか、それらによる判断を保留して聞くことができたのかはここでは論じることはできないが、「本」の語りはどのレベルの受講生にとっても、努力なしに容易に理解できるものではなかっただろう。また振り返りにおいて示された【多様性への気づき】、【共感】、【自分の立ち位置への気づき】はHLが多様性への気づきと受容を促し、「様々な立場に立って考えることができる力」、「他者を理解することで自分自身や自文化を振り返り、問題を発見できる力」を育成するのに有効である可能性を示していると思われる。しかし、一方で「他者の立場に配慮しつつ、自分の意見を発信できる力」の育成にとって有効であるかは明確ではない。「本」による振り返りのディスカッションでも「(受講生が)言いたいことがうまく言えなかったようで残念だった」という意見が聞かれ、また13週以降に行ったディスカッションやポスター発表を見ても、HLが「発信する力」の育成について必ずしも有効であるとは言い難い。

以上のように、留学生を対象とする日本語科目におけるHLの試みは、多様性への気づきと受容を促し、それに基づいて「理解する力」や「考察する力」を育成する可能性を示したが、一方で「発信する力」を育成するには不十分であるようだ。今回のHLはそれだけで終わらず、HLで得たものをどのように発信していくかという、「発信する力」に重点を置いた活動に強固に結びつけていく必要がある。例えば実施の時期を学期の前半にし、そこから「発信する」学習活動として受講生が企画、運営するクラス内でのHLの実施なども検討していきたい。

言語知識に加え、多様性への気づきと受容とそれに基づいて「理解する力」や「考察する力」、「発信する力」といった能力を育成する学習活動を展開しバランス良く連携させ、総合的にそれらの能力を育成することは15週というコースの中でも、大学における日本語教育という大きな枠組みの中でも重要であろう。そして、一連の学習活動が効果的に行われるために、題材、テーマとなるものが学習者にとって、魅力的なもの、興味を引くものが望ましいことは言うまでもないが、必ずしも学習者の興味や関心と一致しているものだけでなく、学習者に新たな関心と興味を呼び起こすものを取り上げていくこと、関心と興味を呼び起こす活動の展開を考えることは重要ではないだろうか。今回は「日本における社会的マイノリティ」という学生にとってあまり身近ではないと思われるテーマで授業内HLを行ったが、「職業」や「生活の場所」といった身近なテーマであってもHLの手法を応用することもできるであろうし、そこから「発信する力」を育成する活動へとつなげていくことも十分可能

だろう。そして、このような多様性への気づきと受容を基盤に置く「理解する力」、「考察する力」、「発信する力」の育成は、言語教育だけでなく大学におけるグローバルな人材の育成という視点からも重要だと思われる。

注

- 1：旧称は「リビングライブラリー」であったが、2010年に「ヒューマンライブラリー」と改称されているため、本稿では「ヒューマンライブラリー」の名称を使用する。
- 2：LGBT Lesbian (レズビアン) Gay (ゲイ)、Bisexual (バイセクシャル)、Transgender (トランスジェンダー、性同一性障害)。
- 3：9項目の中から一番重要なものを一つ、二番目に重要だと思うものを二つ、三番目を三つ、4番目を二つ、最も重要ではないと思うものを一つ選び、菱形(ダイヤモンドの形)に並べたもの。

参考文献

- 工藤和宏(2012)「偏見提言に向けた地域の取り組みーオーストラリアのヒューマンライブラリーに学ぶ」『多文化共生社会の偏見・差別ー形成のメカニズムと低減のための教育ー』明石書店、第8章199-220
- 工藤和宏、矢島祐作、本橋由理、榎本佑紀(2012)「多様性と共に生きる：『ヒューマンライブラリー』の運営を通じた『社会人基礎力』成長の物語」『独協大学英语研究(71)』、99-118
- 駒澤大学社会学部坪井ゼミ(2012)『ココロのバリアを溶かすヒューマンライブラリー事始め』人間の科学新社
- 柴田隆、根岸徹郎(2014)「外国語の『学習のめやす』をめぐりー考察」『専修大学外国語教育論集(42)』、49-63
- 田原憲和(2015)「ドイツ語授業における「めやす」概念を活用した「つながり」の学習効果の考察」『立命館高等教育研究(15)』、85-99
- 坪井健(2012a)「ヒューマンライブラリーの可能性を探る坪井ゼミの実践からの探求」異文化間教育学会第33回年次大会発表用資料(立命館アジア太平洋大学、2012年6月10日)
- 坪井健(2012b)「大学におけるヒューマンライブラリーの実践ー駒澤大学坪井ゼミの取り組みから」『多文化共生社会の偏見・差別ー形成のメカニズムと低減のための教育ー』明石書店、第7章172-198
- 獨協大学外国語学部英語学科工藤和宏ゼミ(2011)「獨協大学ヒューマンライブラリー開催報告書(2012年10月日本語教育学会教師研修コースにて資料として配布)
- 南浦涼介、岸本憲一良、岡村吉永(2012)「学生の自発的研修活動に関する基礎的調査(1)」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要(33)』、63-68
- 宮崎聖乃(2014)「多文化共生社会を目指す取り組みとしてのヒューマンライブラリーー市民活動としてのヒューマンライブラリー実践報告ー」『長崎外大論叢(18)』、185-200
- 横田雅弘(2012)「ヒューマンライブラリーとは何かーその背景と開催への誘い」『多文化共生社会の偏見・差別ー形成のメカニズムと低減のための教育ー』明石書店、150-171
- 渡部留美(2014)「ヒューマンライブラリー実践報告：多文化共生社会の実現を目指す試み」『名古屋大学国際教育交流センター紀要(1)』、41-48

参考 URL

さいたま市民活動支援センター「ブックオブ・リーフぐりーん」

http://genki365.net/gnks13/mypage/mypage_group_info.php?gid=G0000371 (2015年11月15日
最終閲覧)

公益財団法人国際文化フォーラム「外国語学習のめやす」<http://www.tjf.or.jp/meyasu/index.html>
(2015年11月15日最終閲覧)

経済産業省「社会人基礎力」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2015年11月15日最終閲覧)